



# 瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第十一主日A年（2026年6月21日）

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 19 章 2 - 6 a 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 6 章 6 - 11 節

福音朗読：マタイによる福音書 9 章 36 - 10 章 8 節

今日の福音朗読の箇所には「恐れるな」が三度登場します（26節、28節、31節）。特に28節と31節は直訳すると「恐れているのをやめなさい」となります（フランシスコ会訳は「恐れることはない」）。

26節でイエスさまが「恐れてはならない」とおっしゃるのは「覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない」からです。

「覆われている」はギリシア語でカリュプトーといいますが、「何かを何かを覆う」という意味です。弟子たちが宣べ伝えなければならない福音は、人々にとって「覆われているもの」、「隠されているもの」です。ですから、イエスさまがそうであるように、弟子たちもまた福音を宣べ伝える時に迫害にさらされます。なぜなら、福音は覆われて、隠されているからこそ、人々の耳には心地のよいことばではないからです。神のことばを伝えながらも人々に強迫される第一朗読の預言者エレミヤの境遇と同じです。

しかし、「覆われているもので現されないものはない」とイエスさまはいいます。「現される」は、カリュプトーに分離を意味する接頭辞「アポ」が組み合わされたアポカリュプトーが使われています。つまびらかになるという意味と理解してよいでしょう。いつか教えの正しさがつまびらかになる日がやってくるから、恐れてはならないとイエスさまは勧めるのです。これからイエスさまに命じられて宣教活動に出かける弟子たちにとって、間近に迫る迫害は恐れの対象でした。未来への恐れに打ち勝ってイエスさまは「明るみで言いなさい。……屋根の上で言い広めなさい」と勧めます。

28節の「恐れるな」は現在への恐れです。「体を殺す者を恐れるのをやめなさい」とイエスさまは命じます。むしろ弟子たちが恐れなければならないのは、いのちの支配者で「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方」である神さまです。神はいのちをつかさどるのです。

29節の「二羽の雀が一アサリオンで売られている」に注目しましょう。

現代もそうですが、イエスさまの時代も雀はガリラヤではありふれた鳥でした。イエスさまの時代には雀は食物として食べられていたそうです。動物性のタンパク源としては安価で、庶民にとっては身近な食べ物だったそうです。アサリオンはローマの少額通貨だそうで、一アサリオンは当時の一日の賃金一デナリオンの十六分の一にあたるそうです。二アサリオンで一日分のパンが買えたそうです。一羽ではもうけが少なくて、売り物にならないから二羽ずつ売っていたのでしょ

うでしょう。29節の後半の翻訳はいくつかあるようです。「しかし、その一羽さえ、あなた方の父の許しが必要ならば、地に落ちることはない」（フランシスコ会訳）。岩波書店の翻訳は「しかしそのうちの一羽すらも、あなたたちの父なしに地上に落ちることはない」となっており、ギリシア語原文に近いです。佐(さ)藤(とう)研(みがく)先生はこの箇所を注釈し「すなわち、地に落ちる時には神が支えつつ、共に落ちてくれる、の意」としています。少し考えさせられる解釈であり、翻訳です。

最後に32節の「人々の前で」を見てください。

迫害への恐れは未来への恐れ、体を殺す者への恐れは現在への恐れです。しかし、どちらも神が共にいてくださるのです。そのことに信頼して、弟子たちは「覆われているもの」を認めない人々のためにイエスのことばを伝えるのです。こうして彼らはイエスの「仲間」となるのです。

### お知らせ

能登半島地震 支援報告会

6月27日 午後5時より6時まで アントニオ会館にて、

名古屋教区の片岡神父さまがいらして下さって、能登半島の様子を伝えてくれます。支援のための物品の販売会もあります。